

Contents *****

| | |
|-----------------------------------------|----|
| 特集：ドバイに学ぶ観光戦略 | 1p |
| <今週の”The Economist”誌から> | |
| ”The danger of the deal” 「トランプ流ディールの危険」 | 7p |
| <From the Editor> 世界で一番美しいスタバ？ | 8p |

特集：ドバイに学ぶ観光戦略

普通であれば忙しいはずの年度末、わざわざ休暇を取ってドバイに行ってきました。お目当ては3月31日の競馬の祭典、ドバイ・ワールドカップ。趣味が高じて各方面にご迷惑をおかけしましたが、筆者にとってはこれが「人生初中東」。ごく短い期間とはいえ、噂にたがわず「あっと驚く」ドバイ経験を積み重ねることができました。

そこで日本に戻ってみたら、IR法案の与党内決着が話題になっている。「カジノ解禁」に関する危惧は分からないではないですが、ドバイのような徹底した「観光立国」路線を見た後では、いかにもピント外れの議論に思われてしまいます。世界的な「観光産業の時代」をどう考えるべきなのか、私見を述べてみたいと思います。

●かつては知られざる国であった

その昔、全世界でハイジャック事件が相次いだ時期があった。その中のひとつに 1973年のドバイ日航機ハイジャック事件がある。おそらくは「よど号」事件（1970年）やダッカ事件（1977年）の間に挟まって、多くの人の記憶から消えているのではないかと思う。

同年7月20日、パリ発アンカレッジ経由羽田行きの日航ジャンボ機は、連合赤軍とパレスチナ解放人民戦線に乗っ取られ、ドバイに緊急着陸した。その後、3日間駐機して日本政府と交渉するが解決できず、飛行機はリビアに向かう。そこで乗客は解放され、機体は爆破される。犯人たちはカダフィー大佐の「黙認」のもと、国外逃亡に成功する。

こうやって書き出してみると、つくづく時代を感じさせる野蛮な事件である。しかし当時中学1年生であった筆者の記憶に鮮明に残っているのは、当時の「世界地図のどこにもドバイという地名はなかった」ことである。

ドバイはもともとアラビア海に面した漁村で、真珠の輸出を主要産業としていた。その後は英国の中東進出に伴い、中継貿易の拠点となっていく。そしてハイジャック事件の翌1971年、英国のスエズ以東撤退に伴い、アブダビなど他の首長国とともにアラブ首長国連邦（UAE）を結成することになる。

そして半世紀前には地図にも載っていなかったドバイは、今では中東を代表する国際都市に生まれ変わった。埼玉県くらいの面積に人口はわずか245万人、しかもその8割以上は外国人と言われている。一人あたりのGDPは3万9000ドル。誤解なきように願いたいのは、これが石油によってもたらされた繁栄ではないということである。UAEは世界第7位の石油埋蔵量を誇るが、その94%はお隣のアブダビにある。ドバイはむしろ商業都市、金融都市、そして観光都市たらんとして成功を収めてきた。

この間、一種の過剰投資が行われている懸念もある。リーマンショック後の2009年11月には「ドバイ・ショック」という事件も起きている。このときは政府系不動産会社のドバイ・ワールド社の債務不履行が噂され、欧米系金融機関の債権焦げ付きの怖れからユーロ安を招くという騒動になったものだ。その後、アブダビ政府がドバイ支援を決めたことで危機は沈静化するが、国際金融市場の影響を受けやすいことが浮き彫りになった瞬間であった。ドバイ政府の投資は決して透明性が高いものではなく、シェイク・モハメド国王の野心的な計画は「危ない橋を渡っている」面があることを忘れてはならないだろう。

ドバイは2020年には万国博覧会を開催する。2022年にカタールで予定されているFIFAワールドカップと併せて、今後は中東湾岸地域に注目が高まることだろう。それにしてもこの半世紀間のドバイの成功は、どこに理由があったのだろうか。

●発展の鍵は「外から人がやってくること」

ドバイ発展の理由その1は「ハブ機能」であろう。「ドバイは西のシンガポール」と考えると分かりやすいかもしれない。

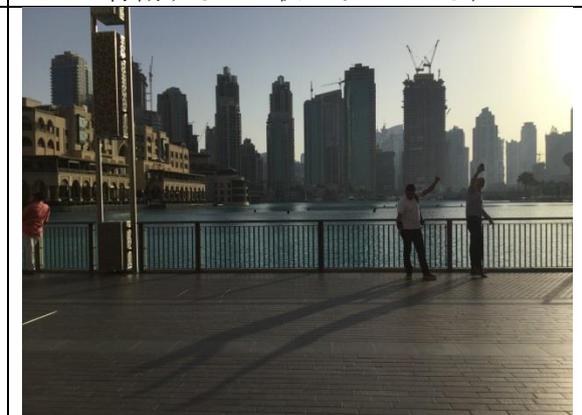
特に国際航空ネットワークにおいて、ドバイ国際空港が果たしている役割は大きい。もちろん24時間運航で、国際線の年間乗降者数はロンドン・ヒースロー空港を上回り世界一となった。そしてナショナルフラッグのエミレーツ航空は、ここからすべての大陸に向けて便を飛ばしている。あらゆる言語に対応できるのが「売り」で、日本人のキャビンアテンダントだけで400人を擁するというから驚くほかはない。

中東は「アジアと欧州とアフリカ」という3大陸の中間に位置している、という「地の利」もある。これは現地駐在員に聞いた話だが、3月最終週のドバイ空港で日本行き便が急に取れなくなったという。理由は「花見客のため」。日本の桜のファンは世界中で急増しているが、開花の時期だけは事前に予想することができない。特に今年は例年よりも早く、3月下旬になって「もう咲いた」というニュースが流れた。それと同時に、ドバイ発の日本行き便の予約が殺到したらしい。

近年、都内の桜の名所では外国人を良く見かける。とはいえ、アラブ人風の観光客はそれほど多くはない。ところがエミレーツ航空は、欧州、ロシア、南米、アフリカなど広範な地域を結びつけている。いろんな地域の「桜ファン」が、いっせいにドバイ経由で日本を目指すために、こういう現象が起こるのであろう。

もうひとつの発展の理由は「観光資源」である。ドバイにはいくつもの「世界一」がある。以下はご存知のものが多いだろうが、まるでディズニーランドのような世界が広がっている。筆者の訪問の理由となった「ドバイ・ワールドカップ」も世界最高賞金額であり、全世界から多くの競馬ファンを集めている。

○ドバイの代表的な観光資源

| | |
|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| ブルジュ・ハリファ（世界最長 828m）とドバイモール（世界最大 1200 店舗） | ドバイ・ファウンテン（高さ 150m の噴水。ただし稼働するのは夜になってから） |
|  |  |
| 世界最大の人工島、パーム・ジュメイラの先端にあるアトランティスホテル | 七つ星、全室スイートルームのブルジュ・アラブ（1泊 20 万円から？） |
|  |  |

●インバウンドの経済効果はかなり大きい

海外からの訪問客は、どれくらいの経済効果をもたらしているのだろうか。これについて、マスターカード社が発表している”Destination Cities Index”という統計が役に立つ。

○世界の都市の国際観光客ランキング（2016年）¹

| 都市名 | 来客数 | 17年予測 | 支出額 | 順位 | 17年予測 |
|------------|--------|--------|----------|-----|--------|
| ① バンコク | 1941万人 | +4.0% | 140.8億ドル | 5位 | +10.9% |
| ② ロンドン | 1906万人 | +5.0% | 160.9億ドル | 3位 | -4.6% |
| ③ パリ | 1545万人 | +4.4% | 120.3億ドル | 6位 | +4.9% |
| ④ ドバイ | 1487万人 | +7.7% | 285.0億ドル | 1位 | +10.2% |
| ⑤ シンガポール | 1311万人 | +2.6% | 156.9億ドル | 4位 | +0.3% |
| ⑥ ニューヨーク | 1270万人 | -2.4% | 170.2億ドル | 2位 | +1.5% |
| ⑦ ソウル | 1239万人 | +0.4% | 93.8億ドル | 9位 | +1.8% |
| ⑧ クアラルンプール | 1128万人 | +7.2% | 72.2億ドル | 14位 | +4.5% |
| ⑨ 東京 | 1115万人 | +12.2% | 112.8億ドル | 7位 | +3.7% |
| ⑩ イスタンブール | 916万人 | +0.9% | NA | NA | NA |

*支出額8位は台北（735万人、99.1億ドル、+6.9%）、10位はバルセロナであった。

ドバイは外国人訪問客数で世界の都市で第4位だが、その消費額ではダントツ第1位、日本円にすればほぼ3兆円である。同国の経済規模を考えれば、「外から人を呼んできて繁栄につなげる」戦略は、見事に成功を収めていることになる。

しかるによくよく考えてみれば、日本人観光客にとってドバイはそれほど素晴らしい場所ではない。まずドバイは暑い。4月を過ぎると気温は40度を超えるそうである。次にイスラム圏であるために（比較的自由な方だとは言えるものの）、お酒や豚肉が手に入りにくい。ホテルの朝食にベーコンがない、というのは個人的には軽いショックであった。もちろんギャンブルもご法度である。従って、ドバイ・ワールドカップでは勝馬投票券を発売していない。賭けたかったら、インターネットで海外の馬券サイトを使うしかない。世界の富裕層を惹きつけてやまないドバイは、こう見えて意外と不自由な場所なのである。

つまるところ、ドバイの「ハブ機能+観光資源」とは「弱者の戦略」だということに気づく。ドバイには歴史や文化的な資源も少ない。もちろん古くから金取引が行われている市場や、古い時代の文物を保存しているドバイ博物館もあるのだが、正直、感心するほどのものではない。歴史や文化的資源であれば、日本国内にもっとすごいものがいくらかもあるのだから。

マスターカード社のランキングを見ると、われらが東京の外国人訪問客数は世界第9位の1115万人。世界的に見れば赤丸急上昇中であって、2012年には489万人に過ぎなかった。これに合わせて支出額の方も、61.5億ドルから112.8億ドルへと倍増の勢いとなっている。いくら東京が巨大都市でも、この急成長による経済効果は小さくないだろう。

さらにこの調査によれば、2009年から2016年にかけて「世界で最も観光客数が伸びている都市」はなんと大阪である。最近よく聞く大阪発の情報を思い合わせると、「いかにも」と頷けるデータである。

¹ <https://newsroom.mastercard.com/digital-press-kits/mastercard-global-destination-cities-index-2017/>

●IR 法案の論議はここがズれている

さらに同調査によれば、2009年から16年の間に世界経済のGDPは21.8%増加している。年平均3.1%は、決して高いとは言えない。ところがこの間に、世界132都市における外国人観光客数は55.2%伸び、その支出額は41.1%増加している。7年間でざっくり5割増しである。

思えば世界経済の規模は、とくに「人口：70億人、GDP：70兆ドル」を超えている。つまりGDP1人当たり1万ドル以上の時代を迎えている。これだけ豊かになれば、海外旅行をする人口は激増する。そろそろ世界が貧しかった時代の常識を捨てなければならない。これから先は、国際的な人の移動が世界経済の主要エンジンと考えるべきだろう。つまり観光客の増加が、世界経済をけん引する時代である（本誌では、以前からこれを「遊民経済学の時代」と称している）。

ところが日本に帰って来てみると、4月3日に「与党IR実施法に関するワーキングチーム」が、IR実施法について合意した、というニュースが流れている。これが変に細かい話ばかりで、なおかつそれが世間的にはとっても不評なのである。ドバイ帰りの眼には、どうにも異和感を禁じ得ない。

○自民党と公明党の合意内容

- * カジノ施設規模規制・・・延べ床面積の3%以内
- * 入場回数制限・・・7日間で3回+28日間で10回
- * 本人確認手段・・・マイナンバーカードを活用
- * 入場料・・・6000円
- * 納付金率・・・一律30%
- * 区域認定数・・・上限3か所

IR基本法案は議員立法で2016年末に成立し、1年以内に政府案を作ることを定めていた。ところが昨年秋、解散・総選挙が行われたために法案作成は1年遅れとなり、自公間で協議が行われてきた。上記の内容は来月にも閣議決定されるとして、今国会中に法案が成立するかどうかは正直、微妙なところであろう。

IR（Integrated Resort＝複合型リゾート）の建設は、「ハイエンドの観光客を取り込む」国際競争に日本が参戦することを意味する。つまりドバイに負けないようなものを作らねばならない。ところがカジノのことばかり、それも入場料がいくらかといった国内向けの議論ばかりが取り沙汰されている。しかるに上記で合意されている通り、IRの中でカジノ施設規模は全体の面積の3%以下と定められている。カジノで発生する収益を使って、それ以外の97%の土地に何を作るのか、という議論がまったくなされていない。わざわざ夢のある議論を避けてしているように見える。

この話における最大のリスクは、せっきやく内外の民間投資を呼び込み、巨額の費用をかけて IR を建設してみたものの、世界の富裕層から「やっぱりシンガポールのマリーナ・ベイ・サンズの方がいい」と見なされてしまうことであろう。国際競争に参加するときは、優勝劣敗がつきものである。国内の依存症対策はもちろん重要ではあるけれども、対外的な評判のことも少しは心配した方がいい。

●真剣に「遊民経済学」の可能性を考えよう

IR が 97%の土地に創ろうとしているのは、MICE と呼ばれる巨大ビジネス施設である。

M : Meeting (会合)
I : Incentive Tour (ご褒美旅行)
C : Convention (国際会議)
E : Exhibition/Event (見本市・イベント)

この手の設備は、近年では世界中で増えている。ところが日本で行われるイベントは、いつも幕張メッセやパシフィコ横浜などの古い施設が使われている。例えばわが国の「オタク・カルチャー」の祭典たる夏冬2回の「コミケ」は、手狭な東京ビッグサイトで行われている。わざわざ3日間の会期を区切って、参加者を細かく割り振るのだが、それが手弁当の運営でトラブルなしで行われていることが一種の「美談」になっている。文化的状況として、いささか寂しいことではないだろうか。

この手の「箱モノ」は近年評判が悪い。それは税金を使って作るからであって、行政が作る箱モノは面白くないし、得てして「金食い虫」になってしまう。だから民間の資金を使って MICE を建設し、維持費はカジノで稼ぎつつ、ドバイやシンガポールに負けない規模で外国人観光客を呼び寄せましょう、というところに IR 法案の狙いがある。しかも、カジノの売上総利益からは3割の納付金を取る。その上で経常利益が出れば、法人税や事業税も取ってしまおう、行政にとってはかなり「虫のいい話」でもある。

思うに日本の観光戦略は、いつも「オマケ」の発想から抜け切れていない。ちゃんとした産業があるのだから、観光などで儲けちゃいけないという「傲慢さ」がある。そもそも「外から人を呼び込む」という意識は、ほんの数年前まで存在しなかった。しかも日本には、ドバイがうらやむような観光資源がある。豊かな自然、治安の良さ、移動の便利さ、美食、文化資源、歴史資源、世界遺産、そしてウィンタースポーツからマリンスポーツまでできる環境など、いくらでもカードがある。そういう状況に甘えて、これらの資源をちゃんと使っているだろうか。

ドバイの真摯な努力に比べると、日本の観光戦略はあまりにもお粗末なものに思える。以上、ドバイで遊んできた者の放言として、お聞き流し願いたい。

<今週の”The Economist”誌から>

”The danger of the deal”

「トランプ流ディールの危険」

Leaders

March 28th, 2018

*誰かをこきおろすなら、これくらい思い切り叩いてみたいもの。ちなみにこのタイトルはトランプ氏の若き日のベストセラー、”The Art of the Deal”をもじっています。

<抄訳>

トランプ流交渉術とは、「脅迫恫喝」「取引成立」「勝利宣言」の3語に尽きる。2016年選挙時の公約は、鉄鋼アルミ追加関税と対中制裁 600 億ドル課税という形で実現した。

外国人は和を乞うために列をなした。3月26日に韓国は対米鉄鋼輸出制限とピックアップ車の関税延長を受け入れた。中国は自動車関税削減や米製半導体購入を議論しているらしい。株式市場はさほど恐れる様子はなく、「貿易戦争は勝てる」とツイートした大統領は勝利を宣言するかもしれない。ただし中国の出方は分からず、他国にも政治事情がある。太平洋を越えた紛争激化の危険性は否めない。中国が譲歩したとしても、トランプが味を占めて繰り返す恐れもある。彼の政策は勘違い経済学と危険な政治学に基づいている。

経済から行こう。大統領は貿易赤字 5680 億ドル (GDP 比 2.9%) よりも、二国間の対中赤字 3750 億ドルにこだわっている。しかし経済学は曲げられない。米国の貿易赤字は家計・企業・政府部門の貯蓄不足、もしくは支出過剰を反映したものだ。保護主義で貿易不均衡は治せない。インドのように、高関税と貿易赤字が共存している国もある。

二国間の赤字は、比較的是正が容易である。米国が中国製品を締め出せば 3750 億ドルの赤字は減るだろう。だが米国が貯蓄・投資行動を変えない限り、その分をほかの国から買うことになる。昨年末の減税効果により、財政赤字は来年 GDP 比 5% に拡大するから、貿易赤字も増加するだろう。トランプ氏が自らを非難する姿は想像しがたいが。

大統領のより根源的な間違いは、貿易を輸出が勝ちで輸入が阿呆のゼロサムゲームと見なしていることだ。貿易による利得とは、モノとカネと知恵が自由に行き来することで新しいものが生まれることだ。加州で設計され中国で製造される iPhone はその典型である。

経済面の誤解があるから、トランプ氏の政治学も出鱈目なものになる。同じ悩みを持つ国とともに、中国に法的圧力をかけるのではなく、むしろ同盟国を脅している。ルールに基づく貿易システムは、米国が設立を助けて国益に資してきたものなのに、それを迂回している。特にお粗末なのは、国家安全保障の懸念を使えば鉄鋼アルミへの関税が正当化されると考えたことだ。米国が WTO を愚弄するのなら、他国もそれを真似するだろう。

管理貿易は勝利ではなくて間違いだ。政治的ロビーの力が市場原理に取って代わり、声の大きな生産者が物言わぬ消費者に対して優位に立つ。技術的変化に対応する能力も失われよう。他国は容易に米国の顰に倣う。トランプ氏のやり方は皆を不幸にしてしまう。

<From the Editor> 世界で一番美しいスタバ？

ドバイで宿泊したリビエラホテルには、日本人コンシェルジェによるお手製の観光案内図が置いてありました。これはいいや、と地図を片手にドバイ探検に出かけることにしました。まずは22ディルハム（660円くらい）の地下鉄1日周遊券を買い、近畿車両製の自動運行列車に乗っていざ出発進行です。

目指すは「世界一美しいと言われているスターバックス」。いえね、日本国内で「世界でいちばん美しいスタバ」と言えば、これはわが郷里の富山環水公園店ということになっている。富山市内でも数少ない観光資源となっているのですが、ドバイにその強敵が存在するということであれば、これは見届けないわけにはまいりません。

ユニオン駅で乗り換えて40分くらい乗っていると、早くもアブダビとの国境に近づきます。途中、未完成部分があるのでバスに乗り換えたりもするのですが、目指すイブン・バトゥーダ駅に到着します。『三大陸周遊記』の偉大なる旅行家・探検家の名を冠した駅でありまして、ここには同名のショッピングモールがあります。モールはドバイには数々あれど、イブン・バトゥーダ（1304～1368）が訪れた全ての地域を模した造りになっている、というのが売りです。

目指すスタバは「ペルシアンゾーン」にありました。どんなものか、まったくイメージになかったのですが、ひとことで言うてしまうと「モスクの中のスタバ」。ドームの内側はペルシア風の幾何学文様で埋め尽くされていて、おおっと息を呑む荘厳さでした。

○どっちのスタバが美しいと思う？



それにしても「美」とはいったい何でしょう。日本人が「美しい」と言うときは、自然の景色や見目麗しい人のことを意識するのではないかと思います。ところが中東圏においては、まるで空白を嫌うかのように稠密に描かれた人工的な文様が「美しさ」である。さすがは偶像否定のイスラム文明、発想が根底から違うのです。

もっともイブン・バトゥーダ店で飲んだコーヒーは、味も値段も他国のスタバと大差ありませんでした。さらにお店の中はガラガラで、遠くからやってくる旅行者はともかく、地元の方々にとっては有難味もさほどではなかった模様。店内はこんな感じでした(↓)。



ともあれ、こんな風に異文化に触れることこそ「旅」の醍醐味というもの。最近、われわれの周囲でよく見かけるようになった外国人観光客も、「おいおい見ろよ、これがニッポンだぜ！」などといろんなことに感動してくれているのかもしれない(本稿に登場する写真は、スタバ富山環水公園店以外はすべて筆者撮影によるものです)。

* 次号は2018年4月20日(金)にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com